EL-Online（改）

アルタイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅ（改）

【Ｎコード】
Ｎ２８０２Ｙ

【作者名】
アルタイル

【あらすじ】
レッドカラー、そう呼ばれる存在であるがゆえに戦いを禁じられた少年。彼は戦いを求めて幼馴染とともに、世界初のＶＲＭＭＯであるＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅのβテスターになった。しかし、そうして訪れた仮想世界はすぐに恐るべきデスゲームと化して――！　天を模して造られた世界と狂信的な運営。密かに選ばれていた１５００人のテスターたち。すべてが破滅へと歩みを進める中、少年は加速しながら刀を振るう――。
※ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅの改訂版です。

※展開についてどうしても納得できなかったので、再投稿です。たびたび申し訳ありません。

プロローグ

果てしなく広がる荒涼とした大地。かつて霞ヶ浦と呼ばれた湖だったそこは、今はその面影すら感じられぬほど乾ききっていた。直径数十キロにも及ぶ広大極まるこの荒れ地には樹木すらまばらで、さながら砂漠のようですらある。

その荒れ地の中心地に、巨大な都市が聳えていた。見事な円形を描くその都市は砂漠に浮かぶ島のようで、中には高層ビルが押し込められたようになっている。周囲の寂しさからはおよそ想像もつかぬほど煌びやかな都で、輝くガラスやビーズをばらまいたようだ。

されど、都市は高い壁で守られていた。周囲の物を一切拒むかのような、高い高い壁。それは見上げれば上が霞んでしまうほどで、人が上ることなど不可能に思えるほどだ。さながら天地の境目のようなこの壁でもって、都市は周囲からほぼ完璧に遮断されている。

だが、その壁には巨大な扉が付けられていた。そこへ向かって、まっすぐな一本道が通っている。外界と都市との唯一のつながり。そんな道を、黒いバスが何台も車列をなして疾走していた。バスの車体には紅い文字で「Ｍａｒｄｏｃｋ　Ｂｒａｉｎ」と書かれている。

「ここが美玖波か」

揺れるバスの車内で、一人の少年がつぶやいた。彼の手には「ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅ　βテスター当選通知」と書かれた紙が握られている。彼はその紙と車窓から見える景色を見比べながら、どこかわくわくしたような顔をしていた。

そんな彼の隣には一人の少女が腰かけていた。つややかな黒髪を肩まで伸ばした、古風な雰囲気のある少女だ。彼女はその凛とした眼を緩ませると、隣の少年に話しかける。

「直人、楽しそうだな」

「そりゃそうさ。環だって、楽しみにしてたんだろ」

「もちろん。ゲーマーの憧れだぞ？　楽しみでないわけないじゃないか」

環はそのはちきれてしまいそうなほどの胸をドンと突き出した。その顔は誇らしげで、希望に満ちあふれている。それも当然かもしれない。彼女たちは世界中の人々が憧れる夢の切符を手にして、今まさに理想郷へと赴こうというのだ。希望を感じていないわけがない。

少年こと直人もそう思ったようだ。彼は「そうだよな」と一言つぶやくと、また視線を車窓へと移す。その眼は夢を見ているようで、顔はどこかうっとりとしている。まるで熱に浮かされたようだ。そんな彼は遠くを見ながら再び薄く唇を開く。

「……あそこに行けば、もう一度刀で戦えるんだよな？」

「当たり前だ。一度どころか幾らでも戦えるぞ」

環の言葉に、直人はわずかながらほっとしたような顔をした。わかりきっていたことではあるが、彼は確かめずには居られなかったのだ。戦えるかどうかを。それほどまでに彼は戦いを求めていた。

いや、正確には戦いに飢えていたというのが正しいか――。

こうして直人がほっとしたような顔をすると同時に、チャイムのような音が流れてきた。直後、ポンと音がして車内アナウンスが始まる。

『まもなく美玖波学術特区内へと入場いたします。特区内へと入場しますと、約三分ほどでマルドゥック・ブレイン本社です。皆様、いまのうちにお忘れ物がないよう、荷物をまとめてください』

アナウンスに従い、素直に荷物をまとめ始める直人と環。二人がそうしている間にも、バスの車列は巨大な門の隙間を潜り抜けた。たくさんの人々の夢や希望を乗せて――。

第一話　レッドカラーの少年

今から約一週間前の七月半ば。暑さのあまり人影もまばらな道場で、直人は一人、黙々と竹刀を振るっていた。竹刀の切っ先は先ほどから寸分たがわぬ直線を描き、心地よい風切り音を響かせる。同時に踏み込む足も、板敷きの床を気迫とともに激しく揺らす。その動きは流麗で、隙も無駄もほとんどない。少年の実力は相当な物のようだ。

だが、そんな直人を見ている何人かの門下生の視線は、決して尊敬の意味合いなど含んではいなかった。憐れみとかすかな侮蔑。彼らの視線に含まれる感情はほとんどそれだけである。なぜなら直人がどれだけ努力しようと、どれだけ強くなろうと、活躍の場が与えられることなどないのだ。直人は『レッドカラー』なのだから。

いまから三年前、直人が十四歳の冬。突如として彼はレッドカラーであると発覚した。以来、三年間にわたって彼は公式試合どころか練習試合への出場も禁止されている。それどころかそれまでに得た段位も、勝ち得てきたトロフィーなどの栄光もすべて彼は奪われていた。レッドカラーとは、それほど大きな意味を持つ言葉であったのだ。

だが、彼は剣道をやめることはなかった。剣を振るうのが好きだったから。心のどこかにもう一度戦えるかもしれないという希望を抱いていたから。ただそれだけの理由である。ゆえに直人は今日も竹刀を振り続ける。もう、戦いへの渇望は満たされることがないとうすうす感じながら――。

夕方、生ぬるい風が僅かながらも冷たさを帯びてきたころ。ようやく直人は竹刀を振るのをやめた。彼は渇いたのどを潤すべく水筒を取りに向かう。夕陽に影を差しながら、彼は道場の隅に置いた荷物へと歩く。その時、彼の視界に青い何かが飛び込んできた。彼はそれをとっさに手で受け止める。不意に、しかもかなりの速度で投げられた物体をいともたやすく。

そうして受け止めてから、彼は軽い自己嫌悪に駆られた。この『常人を少し超えた』動体視力こそ、彼がレッドカラーとされている理由だった。ゆえにそれを使ってしまったことに、言いようもない不快感を覚える。彼はハアっと息をつくと、投げられてきたペットボトルを床に置いた。そしてペットボトルが飛んできた方向を見る。するとそこには、見知った幼馴染の顔があった。

幼馴染こと環は『自家発電』で音楽プレイヤーを聞いていた。文字通り身体から電気を出して、音楽プレイヤーを充電しているのだ。そのレッドカラーのゆえんたる力を隠そうともしない態度に、直人は何となく自分とは違うと感じる。嫌悪などではなく、あくまで違いを感じるだけだが。

そうして直人が微妙な顔をしていると、環はイヤホンを外した。彼女はそのまま直人にゆっくりと近づいてくる。

「久しぶりだな、直人」

「何か月ぶりだ？」

「おいおい、まだひと月もたってないぞ。ま、この道場で会うのは

中学以来だろうが」

環と直人は中学まではこの道場で共に修行している仲だった。だがレッドカラーであることが判明して以来、環は道場を辞めている。道場に残った直人と去った環。そのことがきっかけでなんとなく気まずくなった二人は、今では少し疎遠になっていた。以前は毎日のように互いの家へ出かけていたのが、今ではひと月に一度出かければいい方である。

そんな環が、なぜ直人に会いに来たのだろうか。しかも二人にとってはタブーとも言える場所であるこの道場へ。直人はスッと眼を細め、環を睨んだ。すると環は、その揺れんばかりの胸元から手紙のようなものを取り出す。

「フフッ、今日はこれを直人に届けに来た」

「なんだこれ？　……って、これどうやって手に入れたんだよ！」

紙にはＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅのβテスター当選通知と書かれていた。直人はそれを見て眼を丸くする。

ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅとは、マルドゥック・ブレイン社が発表した世界初のＶＲＭＭＯのタイトルである。仮想現実技術を使い五感のすべてを体感できるということで、世界を騒がせているゲームだ。その話題性たるや、ゲーム関連のネット掲示板が過負荷でサーバーダウンを起こすほどである。

そのＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅのリリースに先立ち、夏休み期間にマルドゥックの本社に泊まり込みで約一ヶ月間のβテストが行われることになっていた。当然、そのテスター枠には応募が殺到し、宝くじ

並みの倍率を勝ち抜かなければテスターにはなれないはず……なのだが。強運な環は見事テスターになる権利を勝ち得たようだ。

「二人分応募して置いたら当たってたんだ。どうだ、一緒にプレイしないか？」

二枚の当選通知を見せびらかして、ニヤッと笑う環。その顔は自信満々だ。それもそうだろう、直人ぐらいの年頃の人間たちにはあこがれの当選通知なのだ。だがそれに対して、直人は少々申し訳なさそうに顔を下に向けた。彼の唇が薄く開かれ、ぼそぼそと言葉が紡がれる。

「ごめん、せっかくだけどやめとく。お前一人で楽しんでこいよ」

「つれないなあ、こーんな美少女が誘ってるっていうのに」

「……お前、見た目は最高だけど中身は半分男じゃないか」

シャツが裂けそうなほど膨らんだ胸を寄せて色っぽい顔をした環を、直人は斬って捨てた。女や胸に興味はある……というより両方とも大好きな直人だが、環は別だ。そのガサツすぎる本性を彼は知りすぎていた。もっとも、環が本気だというなら相手をすることもやぶさかではないだろうが。

「くッ、相変わらず失礼な奴だ。こう見えて私はモテモテなんだぞ？　……まあ、そんなことは置いといて。ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅでは刀を使って戦うこともできるんだが、それでも嫌か？」

「……！！」

薄くなっていた直人の眼が見開かれた。彼は環の手から驚異的な動作で当選通知を奪い取ると、食い入るように見つめる。その表情は、どこか虚無感の漂っていた先ほどまでとは違って、活力に満ちていた。そう、レッドカラーだと告げられる以前の彼のように。

「ククッ……」

彼の口から、かすかに音が漏れた。その空気音は段々と大きくなっていく。そして――

「……ハハハッ、わかった！　ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅをやるぞ！」

少年の叫びが、人気のない道場にこだました。

第二話　少女（前書き）

展開に無駄が多い、直人の個性を生かし切れていないという指摘を受けたためまったく新しく造り直しました。たびたび申し訳ありません。

第二話　少女

天空に螺旋を描くビル。さながらガラスの塔のようなそれは、陽光を反射しながら蒼空に聳える。その頂は雲に突き刺さり、霞んで見えるほど。周囲に林立する高層ビル群と比べても、その高さは頭一つ抜けていた。

そのビルの頂上付近には蛍光緑の文字でＭａｒｄｏｃｋ・Ｂｒａｉｎと描かれていた。この建物こそが、ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅの開発元であるＭａｒｄｏｃｋ社の本社ビルである。βテストはこのビルの中で夏休み期間の一か月、泊まり込みで行われることとなっていた。

直人たちテスターは、すでにビルの中にいた。ひとしきり社内を案内された彼らは、映画館のようなホールに集められている。そのホールは千五百人のテスターたちが入ってもまだゆとりがあるほどの広さだ。直人と環はその扇形に並べられた座席の前の方に腰かけると、正面につけられているディスプレイを見た。

「これから何が始まるんだろう？」

「さあな。説明会でも始めるんじゃないのか」

「うーむ……」

直人はフウっと息をついた。これから何を行うかについては、彼らには一切知らされていない。このマルドゥックという企業は秘密ごとが好きな会社のようだった。先ほどの社内案内でも、そこかしこに立ち入り禁止区域があったのを彼は覚えている。

そうしてしばらくすると、唐突に照明が落とされた。ブザーが響き渡り、ホールに緊張とざわめきが走る。何が起こるのだろうか。テスターたちの不安と期待の入り混じった声が聞こえてきた。

瞬間、光が砕けた。ガラスが砕けるような映像が流れ、直後、壮大な音楽が流れ始める。幅十メートルはあろうかという巨大ディスプレイに、華麗にして壮大な風景が映し出された。百花繚乱の野原、空にゆたう大陸、星が降り注ぐような平原……。荘厳な自然やそこに生きる人々の美しい姿が次々と絵巻のように流れていく。直人も環もその圧倒的な映像美に目を奪われた。

その映像の最後にＭａｒｄｏｃｋ・Ｂｒａｉｎと会社名が大きく映し出され、同時にロゴが浮かび上がった。黒地に紅で、仮面を模したような物が描かれたロゴだ。かなり陰鬱で、呪術的な物を思わせる。企業のロゴにはあまりふさわしくないように思えた。

直人はあまり趣味の良くないロゴに眉をひそめた。だが一方、環は眼を輝かせる。その顔は興奮する少年のようだ。それを見た直人は環がとある病を患っていたことを思い出し、苦笑する。中学はとっくに卒業していたが、まだその病気は治っていないようだった。

そうして直人と環が過ごしていると、明るくなったステージの上に男が上がってきた。デザイナーズスーツをパリッと着こなした、出来る男の見本のような男。だが、そのまだ四十前後とみえる若々しい顔には黒い影がちらほらと見え隠れする。直人はそんな男を見て、ゲームの責任者か何かだなと思った。

「こんにちは、私はマルドゥック・ブレイン社代表取締役の黒柳です。このたびはわが社の新製品、ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅのβテストに

ご参加いただき誠にありがとうございます」

男の挨拶に、ワッと拍手が鳴った。会場全体にバチバチという音が響き渡り、何やら声まで上げている者もいる。ステージ上の黒柳はそんなテスターたちに、にこやかに笑いかけながら話を続けた。

黒柳の話はそのほとんどが事務的な連絡とＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅのごくごく基本的な説明に終始した。いずれも事前に渡されたパンフレットに載っているような内容ばかりであり、目新しいものはさほどない。さすがに一流企業の代表を務めるだけあって、人を引き付けるような話し方をする黒柳であったが、内容が内容だけに直人は話の後半部分をほとんど聞いてはいなかった。それは環も同様なようで、直人の耳にすやすやという寝息が聞こえてくる。

こうして直人があくびをした時。突如として黒柳の話のトーンが上がった。その音程の変化に、直人は眠そうな目をこすってステージに注目し、隣の環もあくびをかましながら起き上がった。二人はそのまま、熱弁をふるう黒柳へと視線を集中させる。

「では最後にＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅ開発チーム主任、神流からのあいさつです！」

黒柳がひどく仰々しい態度でステージの袖の部分を示した。ゲームの開発者を迎え入れるべく、テスターたちから盛大な拍手が巻き起こる。ＥＬ－Ｏｎｌｉｎｅの開発者については今まで、その一切が謎に包まれていた。それが明らかになるとあって、会場の興奮は尋常ではない。広いホールの中はさながらスタンディングオベーションのような状態だ。直人と環もそれに巻き込まれるような形で拍手を送る。

その嵐のような音量と会場中の注目の中に、小さな人影が現れた。ひどく細く華奢な印象のその人影は、まっすぐにステージ中央へと向かっていく。その姿に、拍手がにわかにまばらとなった。直人と環も驚きのあまり目を丸くする。

「環、あれってもしかして……」

「いやまさか……」

どよめく客席、響く疑問。そんな中で渦中の人物は何事もないかのように平然とステージ中央にたどり着いた。その人物はちょっと背伸びをしながらマイクの高さを調整する。そして、ひどく無機質かつ事務的な口調で告げた。

「みなさんこんにちは、私が神流です――」

ひどく幼く頼りなげな声。儚げで神秘的なそれは、客席のテスターたちの耳によく響いた。テスターたちはその声に、神流の年齢を確信する。

――どう考えても、十代前半ほどの少女だ――と。

綺羅星のごとき街灯、ネオン。この閉鎖都市――美玖波の繁栄を象徴するかのように、その暗い影を覆い隠すかのようにそれらは輝く。そのまばゆい光を眼下に見下ろす展望レストランで、直人はガラスにもたれながら明日に思いを馳せていた。彼はグラスに入った

ジュースをワインよろしく燻らせながら、フウと軽く肩を落とす。

ゲームの開発者が少女だというのは、すさまじいばかりの驚きをテスターたちにもたらした。葵の登場直後、広いホールは彼らの悲鳴じみた声に包まれ、直人の耳が痛くなるほどだった。あのどよめきを、直人は鮮明に覚えている。それほどのインパクトがそれにはあった。

しかし、それが静まったのもあっという間だった。神流葵の弁舌の才は悪魔じみていた。いや、人を魅了するという意味ではある種の宗教家に近いのかもしれない。とにかく、彼女が口を開いた途端にテスターたちは黙った。スウッと脳に侵入してくるような甘い美声、一切の澱みなく続けられる話。そのすべてが、テスターたちの口を閉じさせた。彼らはまたたく間に彼女の話に夢中になり、声を上げることのない聞き手に甘んじたのだ。

「ああ、胡散臭い……」

直人はそう愚痴っぽく漏らすと、レストランの中へと視線を移した。たくさんの人間たちが、舞踏会よろしく談笑したり食事に舌鼓を打っている。いかにも楽しげな雰囲気が、そこには広がっていた。

葵の挨拶が終わった後、テスターたちはさまざまな検査を受けさせられた。そしてその後、彼らはこのレストランで運営主催のパーティーに参加している。βテストの前夜祭と、テスター同士の懇親会を兼ねたパーティーのようだ。

そんなパーティーで、直人は壁の花に徹していた。もともとこういう会は苦手であったし、今日はそういう気分でもなかった。運営の人間たちが胡散臭くてしょうがないのだ。直人は彼らから、どこ

か異様なものを感じていた。まるでカルト教団にも通じる、ある種の不気味さをだ。ゆえに、彼はこのパーティーを余り楽しむことはできない。

もっとも、そんなことを感じていたのは直人だけだったようだ。他の人間はパーティーを思いっきり楽しんでいるようであるし、彼とともにいた環までもどこかへ消えてしまっている。大方、他のテスターたちと旨い食事を楽しんでいるのだろう。ゲーム廃人ではあるが、環の対人スキルは高い。しかも、直人のことを考えている割には彼を置いて行くことが多々ある。今日も彼女は、直人をおいてきぼりにしたようだ。

一人で葡萄ジュースをドンドンと飲む直人。酒の空瓶よろしく、彼の近くのテーブルに葡萄ジュースの瓶が並んでいく。すると、その歪んだ光の向こうから男が現れた。三十手前のすかした男で、コートとタバコが嫌に似合っている。

「こんばんは、君一人かい？」

「あんた誰だ？　あいにく、俺は男と一緒にパーティーを楽しむ趣味はないぞ」

「なーに、一人だけ寂しくしてる奴がいたから声をかけただけさ。職業柄、変わった奴をみると止まらなくなっちまうんでね」

「職業柄？　探偵でもやってるのか」

「そんなところさ」

男はそういうと、薄っぺらい名刺を差し出してきた。そこには明

田興信所代表、明田光と書かれていた。直人の眠そうな眼が少し開かれる。

「へえ、本物の探偵じゃないか。で、これから殺人事件でも起こるのか？」

冗談っぽく直人は笑った。しかし、光は少し眼を細めるときざっぽく言う。

「俺はどこぞの疫病神じゃないぜ。だけど、事件は起こるかもな」

「え、まさか」

「そのまさかだよ」

光の眼の奥には、鋭い光があった。直人は虫がうごめくような感触を皮膚に覚える。彼はとっさに眼を細めると、周囲に視線を投げた。彼の眼が猛禽のように鋭くなり、周囲をとらえる。だがここで、光一が笑った。

「素人にはわかりゃしねえよ。ま、せいぜい気をつけておくことだな」

光はポンと直人の肩をたたくと、いまどき珍しい煙草を燻らせながら立ち去ろうとする。ひょろ長い背中が直人から遠ざかっていった。しかしここで、光は思い出したように直人の方へ戻ってきた。

「そういえば、君の名前を聞いてなかったな。なんて言うんだ？」

「……リアルネームか？　それともプレイヤーネームか？」

「そうだな、両方頼む。俺のプレイヤーネームも教えるから」

直人は少し考えた。この男に名前を知らせることのメリットとデメリットを、天秤で量る。すると天秤はすぐにメリットに傾いた。

「リアルは柏木直人。プレイヤーネームはカズトにする予定だ」

「ありがとさん。俺のプレイヤーネームはコゴローだ。それじゃ、今度こそさよなら」

光は今度こそ立ち去って行った。その足音を聞きながら、直人は一人で小さく肩を落とした。

「コゴローか。ずいぶんと名探偵を気どってる人だな……」

喧噪のなかに溶ける声。今回の出会いの意味を、まだ誰も知らなかった――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2802y/

EL-Online（改）

2011年12月21日00時58分発行